

第6分科会 各教科等を合わせた指導（特色ある学習）

テーマ 「主体的に活動し、豊かに生きる力や働く意欲を育む指導」

協議の柱 豊かに生きる力や働く意欲を育むための教育活動について

研究発表2 「学校と地域で紡ぐ作業学習」～貢献を超えて協働そして共生をめざして～

発表者 鳥取県立白兔養護学校 教諭 藤原 諒

司会者 鳥取県立白兔養護学校 教諭 白水 健一郎

助言者 広島県教育委員会事務局学びの变革推進部 指導主事 濱崎 奈緒
特別支援教育課特別支援教育指導係

I 実践に当たって

1 学校について

本校は、鳥取市の北に位置し、古事記に記されている神話で有名な『因幡の白うさぎ』の舞台となった白兔海岸に面した知的障がいのある児童生徒が学ぶ特別支援学校である。小学部、中学部、高等部のそれぞれの学部には、単一障がい学級、重複障がい学級、訪問学級がある。本校がある末恒地区は、16の町区自治会からなり、約2,500世帯が暮らす自然環境に恵まれた地域で、学校周辺には、高齢者施設や障がい者福祉施設等がある。

本校では、学校教育目標の「人と関わりながら自立と社会参加に向けて努力する子どもの育成」をめざし、平成28年度から「社会とのつながりを大切にした教育活動の充実」をテーマに5カ年計画による研究を推進してきた。その中で平成29・30年改訂学習指導要領の趣旨や重点等を押さえながら、本校教育の12年間で児童生徒がどんな力を身に付け、伸ばしていくかを重視し、教育課程及び年間指導計画、指導内容、指導方法の見直しを進めてきた。そして、高等部の単一障がい学級、重複障がい学級においては、「地域貢献」、「地域協働」をキーワードとして作業学習を軸に実践を積み重ねてきた。

2 高等部の生徒について

(1) 実態

高等部単一障がい学級の教育課程では、作業学習を週6時間、職業科を週2～3時間設定しており、生徒は主にこれらの学習の中で働くことについて学んでいる。ここ数年の生徒の様子に目を向けると、素直で真面目な生徒が多く、興味や関心のある学習には意欲的に取り組む姿が見られる。一方で、産業現場等における実習や異学年で作業班を構成する作業学習の場面になると、不安や緊張から消極的になり、挨拶や返事、報告、相談等のコミュニケーションを自分から取ろうとする姿や人とかかわろうとする姿が見られにくく、自分の気持ちを相手に伝えることに対しても苦手意識が感じられる。自分で考えて動くことや学習場面も少なく、他者からの作業指示を必要とすることが多い。

(2) 育てたい力

このように、生徒たちに見られる消極的な姿や人とのかかわりを苦手とする課題は、普段から実地的な経験が少ないことや失敗経験はあるものの、成功経験や人から認めてもらった経験、人の役に立った経験等が少ないことに起因している。これは、自己有用感が十分に育っていないとも考えられる。

そこで、高等部の生徒に育てたい力として、以下の項目を意識して、地域とかかわる作業学習の授業づくりに取り組むことにした。これにより、働く上で必要な力やその基盤である自己有用感を育んでいくことに繋がるのではないかと考えた。

- ・元気のよい挨拶や礼儀正しいふるまい、困ったときは自ら相談したり、仲間と協力したりする解決力。
- ・仕事を通して自分が認められているという実感、所属感、仕事そのものに対する満足感。
- ・他人の役に立った、喜んでもらえた等の経験を土台とした自己有用感。

2 作業学習について

本校の作業班は、総合サービス班、窯業班、木工班、織物班、農業班、基礎作業班の6つで構成している。

これまでの作業学習では、教師が提示した作業を一定時間確実に取り組むことで、働く力を高めることをめざしてきた。この学習スタイルでは、働く態度やルール・マナーが身に付き、指示された作業のスキルが育った。一方で、ルーティン化された作業は進んで取り組むことができるが、自分たちで考えて取り組む場面が少なかったこともあり、教師からの指示を受けなければ作業に取り組むことが難しいという課題があった。また、作業製品を販売する活動を校内で年1回実施していたが、かかわる人が教師や生徒、保護者に限られていた。そのため、働く目的や意義についての考えの深まりや、働くこと及び貢献することに対する意欲が十分に育ちにくいという課題も見えてきた。

そこで、指示通りに行ったり、校内のみで行ったりする今までの学習スタイルからの変革をめざすことにした。そのために、平成29・30年改訂学習指導要領のポイントを重視した「主体的・対話的で深い学び」と「地域協働活動」の2つの柱を軸に、生徒に育てたい力を明確にしつつ、末恒地区における「共生社会」の実現をめざして、まずは、「地域貢献」に向けた授業の充実を図ることにした。

II 実践内容

1 作業学習における実践

平成28年度より学部研究では「卒業後に必要となる力を意識した、主体的・対話的で深い学びをめざした授業づくり」をテーマに、各作業班が学習内容や指導方法、指導計画等の見直しを実施してきた。同時に、共生社会の実現に向けた取組への一歩として、まずは、地域の方々に本校のことや生徒のことをもっと知ってもらい、学校に足を運んでもらおうという願いから、作業製品販売会「にこにこショップ」の開催（年1回：12月）や外部販売会「白兎よろずや」を複数回実施して、地域貢献活動への足掛かりとして白兎養護学校を地域にアピールしてきた。以下に2つの作業班による「主体的・対話的で深い学び」「地域貢献」「地域協働」に関する実践を紹介する。

(1) 農業班の実践

農業班では、生徒を2グループ（1グループ2、3人）に分け、各グループで野菜の栽培、収穫をするようにした。教師からの作業指示は最小限にし、同じグループの生徒同士が、作業当日や1週間の天気、野菜や畑の状態を参考にしながら相談をして作業内容を決めるようにした。さらに、毎時間作業記録をつけ、その日の天気や気温、作業内容、野菜の様子等を記録することで振り返って確認できるようにした。この取組を通して、以前は、困った事があると、すぐ教師に指示を仰いでいたが、徐々に自分たちで原因を調べたり、対策を考え対応したりする等、生徒が試行錯誤しながら主体的に学習に取り組むようになった。また、生徒同士で話し合ったり相談しあったりする等、生徒同士の関わりが増え、協力し合う姿も見られるようになった。

さらに、収穫した野菜の販売に学校周辺の地域へ出かける活動も取り入れた。販売活動は、自

高等部 作業班 (令和元年度)	
作業班	主な活動内容
総合サービス班	○白衣の洗濯、アイロンがけ、地域に出かけて要望に応える地域サービスと給食配膳、名刺作成、喫茶サービス、清掃等。
窯業班	○小皿や茶碗等の製品作り。
木工班	○木工工作機械を使い、簡単な家具や置物等の製品作り。
織物班	○機械織機を使って作製した織物から、コースターやバッグ等の製品作り。
農業班	○畑で季節に応じた野菜作りや山ではしいたけの栽培。
基礎作業班	○屋外で体を動かして行う作業と室内で手先を使う作業。体を動かす作業では、花壇作り、野菜作り、雨天時は軽作業。室内では、縫い物、ビーズ作品、牛乳パックからの再生紙作り等。

分たちが育てた野菜を台車に乗せ、宣伝用ののぼり旗を持ち、鐘を鳴らしながら地域の方々に呼び掛けて練り歩くスタイルで実施した。当初は、慣れない活動への不安や戸惑い、緊張から呼びかける声が小さく、野菜が全く売れずに落ち込んでいた。しかし、生徒たちからは「もう少し頑張ってみる」「人が集まる場所に行けばよいのでは」と徐々に前向きな声が聞かれるようになり、公民館前や保育所前での販売では、多くの地域の方に野菜を購入していただくことができた。また、地域の方からは「大きくてすごい」「食べ応えがある」等野菜に対して良い評価をいただいたり、「今度はいつ来ますか」「今度は先にきてください」等期待を寄せる声をいただいたりした。次第に生徒たちの呼びかける声にも熱がこもり、大きな声に変わっていった。さらに、嬉しそうな表情で接客をし、お礼を言ったり、会話をしたりしながら地域の方々と触れ合うことができ、達成感や充実感を感じる活動となった。この貴重な経験をさらに積むために、令和元年度は、販売活動を行う12月から2月の期間中、月1回だった販売回数を月2回に増やし販売活動を行った。



(2) 木工班の実践

木工班では、地域の公民館や保育所と連携して製品づくりに取り組んだ。公民館との連携では、外部販売会「白兔よろずや」に向けた製品づくりの際、生徒から「販売会に誰が来るのか」「何が売れるのか」「何を作ればよいのか分からない」といった疑問が出てきたため、生徒数名が公民館に出向き、公民館館長やその他の関係者に聞き取りを行った。実際に利用者の声を聞くことで、喜ばれる製品や必要とされる製品を知ることができ、植木鉢カバーやベンチ等の新たな製品づくりに繋がった。また、保育所との連携では、積み木を作る作業の際、どんな形、大きさ、色があったら良いかを話し合う中で、保育所の方にインタビューを行った。実際に園児と一緒に積み木で遊んでみたり、保育所の方に感想を聞いたりしながら製品の良い点と改善点を参考にした製品づくりを行った。その中で生徒は、園児の遊びが広がるように積み木の形を増やしたり、ケガをしないように角を丸くしたりする等、園児の事を考えた製品づくりをすることができた。



これらの活動を通して、生徒は相手のことを考え、目的意識をもって作業製品づくりをする力や思考、判断（使いやすい工夫、売れるための工夫）しながら作業する力が育ってきた。また、たくさんの人とかかわり、やりとりをすることで、自分たちの学習活動に喜びを感じたり、役立ち感を味わったりすることもできた。

Ⅲ 成果と今後の課題

1 生徒の変容と今後の授業づくり

地域とつながりながら学びを深めていく過程で、生徒は以前よりも積極的な姿勢で作業学習に向かうようになり、自分たちで考えて取り組もうとする姿や話し合いをしようとする姿が増えてきた。生産、販売活動を繰り返すことで、職業生活に必要な挨拶や対人的なスキル、仕事に対する責任感等も育ってきた。販売活動に向けた生徒の事前、事後アンケートを比較してみると、当初は接客、販売することへの不安を感じている生徒が多かったが、販売活動を重ねるごとに「製品が売れてうれしい」「頑張りたい」「とても楽しみ」と前向きな回答の数が大幅に増え、学びの場を地域に広げたことは、大変有効であった。また、生徒たちから「お客さんに喜んでもらいたい」「たくさん購入してもらえものが作りたい」等という声が聞かれるようになったり、実際に使われる方の意見を取り入れ製品を作るようにしたりする等、相手を意識した声や製品づくりに対するアイデアが聞かれるようになってきた。

授業づくりでは、令和2年度の校内研究のテーマである『合わせた指導における指導計画の見直

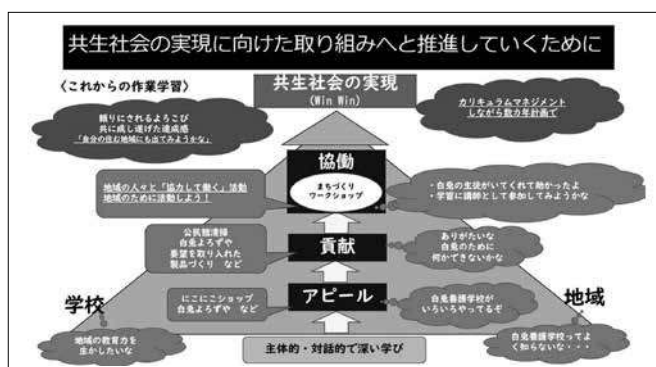
しと学習評価』に取り組んでいる。作業学習については、教員間で各教科の視点や本校の生徒に育てたい力、主体的・対話的で深い学びにつながる指導目標等を話し合い、単元計画にまとめて授業改善に生かしているところである。次年度につながる評価の在り方を検討したい。

2 地域貢献、協働活動から共生社会の実現に向けて

令和元年度までの取組は、学校が地域に依頼をして行う販売活動や製品づくり、清掃活動等の貢献活動（総合サービス班による公民館の窓清掃と基礎作業班による公共施設のペットボトルの洗浄解体等）が大半であった。今後はさらに、地域との関わりを広げていき、「白兔養護学校の生徒がいてくれてよかった」「助かった」と頼りにされる存在をめざし、地域にとって互いが必要な存在となれるような関係を築くための活動に取り組んでいきたいと考えている。

そこで、今年度は「まちづくりワークショップ」を開催し、生徒も末恒地区のまちづくりに参画していくことを計画している。この「まちづくりワークショップ」では、白兔養護学校の生徒とPTA会長、自治連合会長、公民館長、地区社会福祉協議会長、地区老人クラブ会長、主任児童委員、公民館事務局等の関係者が一同に介して、まちや学校のニーズを話し合い互いにできる「協働活動」を模索する予定である。その第1回目の開催を今年の9月に予定している。

この活動によって、本校をさらに知ってもらうことができ、地域における本校への理解、障がいのある方への理解が進み、さらには、共生社会の実現に向けた取組ともなるのではないかと期待している。



<指導・助言>

- ・本実践は、生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にした上で、様々な活動に取り組まれている。新学習指導要領に示されている「家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携」における「地域社会との連携及び協働」「地域における世代を越えた交流の機会」など、他校の参考になる取組であると考える。
- ・地域等での販売会、公民館や保育所と連携した製品づくりなどを通して、いろいろな人から評価をもらう経験を積み重ねることで、生徒が「人に認められてうれしい」「人の役に立ってうれしい」と実感し、次への学習意欲を高めていくことができている。
- ・今後に期待することとして、新学習指導要領に「高等部の生徒の経験を広げて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性を育むために、学校の教育活動全体を通じて、高等学校の生徒などと交流及び共同学習を計画的、組織的に行う」と示されている。これまでも、様々な世代と交流することで、生徒の主体的な姿が見られるようになるなど取組の成果が見られており、今後は、高等学校の生徒と交流及び共同学習を行うことで、生徒の生きる力を育むような実践を期待したい。